

生徒参画による制服選択制の導入

—多様性を尊重した制服のあり方の検討—

Introduction of alternative choices of School Uniform by involvement of students: Consideration of School Uniform respecting for Diversity

生徒指導・保健安全部 寺本 誠

Makoto TERAMOTO

<要旨>

本稿の目的は、お茶の水女子大学附属中学校における制服検討の過程と、選択制を導入するに至った経緯を検討の中心母体であった生徒指導・保健安全部主任を2022年、2023年度に務め、また、同時期に生徒会役員会顧問を務めた筆者が報告するものである。

ジェンダーレス制服を導入している他校の先行事例は多くあるものの、本校の場合は決して容易ではない。本校の女子の制服はセーラー服タイプであり、スラックスを導入している学校の大部分がブレザータイプ、あるいはスラックス導入を機にブレザータイプに切り替える学校がほとんどであった。セーラー服の上衣にスラックスを組み合わせる制服は全国的に見てもあまり事例が無く、また、人によってそのスタイルの受容の仕方にはかなり幅があることが予想された。さらに、セーラー服を廃止して、男女ともブレザーに切り替える選択肢も検討しづらい事情が本校にはある。それは、女子の制服にはベルトを付けることが本校創立以来の服装規定として決まっており、ブレザーへの移行はその伝統を捨てることになり、生徒、保護者、教職員、卒業生を巻き込み、議論が紛糾する事態になることが想像された。

生徒指導・保健安全部内でも様々な意見があり、早期の実現は難しい状況であった。困難が予想されたが、検討の中で常に立ち戻ったのは実際に着用する生徒主体に考える、という点であった。本稿では、実現に向けた経過について、教職員、生徒の動きを中心に述べる。

キーワード：制服の検討 制服選択制 生徒参画 多様性の尊重

I はじめに

2023年3月2日、本校校長相川京子より2023年10月より、制服選択制を導入することが全校生徒に告知された。2023年に創立76周年を迎える本校の長い歴史において、初めて制服の改訂がなされることが決定した瞬間である。本稿の目的は、お茶の水女子大学附属中学校における制服検討の過程と、選択制を導入するに至った経緯を検討の中心母体であった生徒指導・保健安全部主任を2022年、2023年度に務め、また、同時期に生徒会役員会顧問を務めた筆者が報告するものである。

本校の制服は全国でも唯一無二の形を持つ。女子用の制服には本校の前身である東京高等女子師範学校の袴に帯を締めて制服としていた形式を引き継いでおり、1947年に附属中学校が創立され、制服としてセーラー服が導入された後も、徽章の付いたベルトを着用する伝統を保持し続けている（図1）。

本校が長い伝統を持つ制服の検討を始めたきっかけは2021年度に生徒会役員会が校内に設置した目安箱⁽¹⁾に投函された一通の投書である。そこには、ジェンダーレス制服の導入を求める切実な意見が書かれていた。2021年度の役員会では、この投書への対応を含めた学校生活全般に対する生徒の声を幅広く集めるために、6月に全校生徒対象にアンケートを実施した。その結果によると、ジェンダーレス制服を認めるべきと回答した生徒が多くいることが分かった⁽²⁾。だが、制服の改訂は学校の在り方に関わる大きな事柄である。2021年度役員会では改訂に向けての話し合いは、それ以上進展させることができなかった。しかし、このアンケートにより、ジェンダーレス制服を求める意見があることは生徒・教員間でも共通に認識することができた。

全国的に見ても、近年多くの学校が制服選択制を導入している。2015年に文部科学省から『性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について』が発行されたことを契機に、今まで学校現場では当たり前とされていた男女の区分を見直す動きが見られるようになったと考えられる。見た目ではっきりと男女を区別する制服は、最も象徴的な存在であると言えよう。

例えば、東京都教育庁「都立高校における制服の自由選択制導入の推進について」によると、2016年は制服又は標準服のある都立高校180校のうち、93校（51.7%）の学校が女子スラックスを導入していたが、2021年には、182校中、147校（80.8%）へと大幅に増加している⁽³⁾。また、埼玉県では、女子用制服がある130校のうち、2023年4月より全ての学校において制服選択制を実施することが決まった。中学校でも自治体レベルで制服の選択制を導入するところが現れた。たとえば、東京都中野区では2019年からすべての区立中学校で女子生徒がスカートとスラックスを自由に選べるようになっている。また、本学に併設されているお茶の水女子大学附属高等学校でも2020年よりスラックスを導入している。

こうした多様性を求める社会の要請や、制服で男女をはっきりと分けることに違和感を持つ生徒たちの声を受け、生徒指導・保健安全部では、2022年度の活動方針を決めるにあたり、ジェンダーレス制服の導入を検討すべきという声が上がった。そこで、通常の分掌内業務に加え、ジェンダーレス制服の導入を新規プロジェクトとして立ち上げることにした。管理職が定める2022年度の学校経営方針にもジェンダーレス制服の導入が盛り込まれた点も指導部として踏み切ることに繋がった。

ジェンダーレス制服を導入している他校の先行事例は多くあるものの、本校の場合は決して容易ではない。本校の女子の制服はセーラー服タイプであり、スラックスを導入している学校の大部分がブレザータイプ、あるいはスラックス導入を機にブレザータイプに切り替える学校がほとんどであった。セー

ラー服の上衣にスラックスを組み合わせる制服は全国的に見てもあまり事例が無く、また、人によってそのスタイルの受容の仕方にはかなり幅があることが予想された。さらに、セーラー服を廃止して、男女ともブレザーに切り替える選択肢も検討しづらい事情が本校にはある。それは、女子の制服にはベルトを付けることが本校創立以来の服装規定として決まっており、ブレザーへの移行はその伝統を捨てることになり、生徒、保護者、教職員、卒業生を巻き込み、議論が紛糾する事態になることが想像された。

本校でもかつて「制服検討委員会」を立ち上げ、時代に合わせたより機能的な制服へと微修正を加えた経験があった。だが、私たちが目指したのは、制服そのものを変えることである。生徒指導・保健安全部内でも様々な意見があり、早期の実現は難しい状況であった。困難が予想されたが、検討の中で常に立ち戻ったのは実際に着用する生徒主体に考える、という点であった。本稿では、実現に向けた経過について、教職員、生徒の動きを中心に述べる。



図 1

▲冬用制服



▲夏用制服

II. 本校の制服の歴史

本校の歴史は明治 15 年の東京女子師範学校附属高等女学校の設置に端を発する。昭和 22 (1947) 年 4 月 1 日、6・3・3 の新学制実施に伴い東京女子高等師範学校附属高等女学校は中学校と高等学校に分かれることとなった。このとき附属高等女学校第 1・2 学年修了者 (附属小学校高等科第 1 学年修了者を含む) を中学校第 2・3 学年とし、新たに入学した男子 24 名、女子 76 名をもって第 1 学年とし、男女共学の中学校として発足した。

現行の女子のセーラー服は昭和 5 (1930) 年に東京女子高等師範学校附属高等女学校の標準服

として設けられ、同 7（1932）年に制服となった。セーラー服となった後も、着物に袴の時代から引き継ぐ腰のベルトが特徴的である。

ベルトには徽章が付けられている（図 2）。学校間の服装上の区別をつけるものとして徽章が用いられるようになったのは、明治 32（1899）年の高等女学校令公布後、高等女学校が各地につくられ、女子中等教育への需要が高まった頃とされる⁽⁴⁾。徽章には大別して、バッジ、バンド、袴のライン（袴章）の 3 種類があった。バッジ型は胸や袴の紐にピンで留められ、バンド型はベルト状の帯とバックルで構成され、腰の部分に付けられた⁽⁵⁾。



図 2 徽章とベルト

本校の徽章はバンド型にあたる。このバンド型の徽章は東京女子高等師範学校附属高等女学校時の明治 39（1906）年 6 月から使用してきたものである。東京女子高等師範学校附属高等女学校時の制服の帯と金具のデザインがもとになったもので、この徽章が制定された当時は女子の通学服装は和服に袴で、帯を袴の紐の上にしめるように考案された。徽章の輪郭は八稜鏡を象り、蘭と菊の模様を配してある。八稜鏡は、明治 9（1876）年に 昭憲皇太后陛下から賜った御歌『みがかずば』にちなんだものである、なお、『みがかずば』は現在もお茶の水女子大学附属小・中・高の校歌となっている。ベルトの帯は生糸の博多帯（織方）で地色は濃い 紫色（古代紫）だったが、服装の変化に伴い、紫 を含む濃い茶色に変わった。帯の中央には 緑 の筋があり、白い茶の実の中に水の字を織り出している。この茶と水とは学校が文京区湯島の『お茶の水』にあったのでその地名を取り上げたものである⁽⁶⁾。

現在はセーラー服の上衣にベルトを通す紐をつけて、バックル部分が徽章となっている。全国の高等女学校の模範として知られていた東京女子高等師範学校附属高等女学校にて明治 39 年にバンド型の徽章が制定されると、同校のバンド型の徽章は憧れの存在となったようである。その存在がいかに大きかったか、『お茶の水』16 号⁽⁷⁾に同女学校入学が決まった直後の同校生徒の憧れが記述されている。

「女学校へ入学出来るお通知を受取るとすぐ、私はあのきらきら光ったバンドが目に見え浮かんだ。今に学校が始まると、あれを光らせて通学するのだと思ふと、もう嬉しくて嬉しくてたまらない。三月十六日にお母様が、学校へいらっしゃって、バンド、書物等を持って来て下さった。私はお母様を見るとすぐ飛んで行って、包に飛び着いてすぐ明けて見ると、バンドは薄い紙を通じてきらきりと、金色の光を輝してゐる。私はこみ上げて来る嬉しさをじっとこらへて、バンドに見入った。それからお休中にあのバンドを取り出して、見ない日はなかった。」⁽⁸⁾

このように長い伝統を持つ徽章とベルトだが、中学校発足時に廃止される可能性があった。『お茶の水女子大学附属中学校創立二十周年記念誌』⁽⁹⁾によると、昭和 22（1952）年 5 月 8 日の職員会議にて、「附中徽章の件」が議題となっている。ここでは、「バンドをなくする意見多し」とあり、女子は胸に、男子は帽子に付けることが決定された。教員の中では徽章は残すものの、ベルトとしてではなく、異なる形を志向していたことが分かる。しかし、昭和 23（1953）年 5 月 13 日の職員会議にて、「中学女生徒よりバンドをつけたい希望あり。」と記され、同年 7 月 20 日の職員会議にて、「中学女子にも高校と同じものをつけさせることに決定」とある。さらに、昭和 28（1953）年 12 月 17 日の職員会議で「徽章・

バックル新調の場合、従来の「女高師高女」をやめ「お茶の水」とすることに決める」とあり、ここにおいて現在に至る附属中学校の徽章・バックルの原型が完成したと思われる。

一方附属高等学校は、昭和 44 年の制服改訂に伴いベルトの廃止に踏み切っている。その理由として次のように述べられている。「この問題は、セーラー服（昭和 5 年～）に校章バックル付きベルト（明治 39 年～）というスタイルが、奇異である、非機能的である、誤ったエリート意識の象徴であるといった生徒たちの不満の声に端を発しているが、実は学生紛争という時代の波に後押しされ、これまでの古い学校の体質を打ち破り、生徒たちの力で新しい何かを生み出そうとする起点となる出来事であったと解釈している。」⁽¹⁰⁾

附属高校が制服改訂に踏み切って以降、附属中学校が唯一東京女子高等師範学校の伝統を受け継ぐ存在となっている。生徒たちの中にはその長きにわたる伝統を大切にしたいという気持ちと、重さ、窮屈さ、暑さ等の着用することによる現実的な問題の解消を求める両方の意見がある。今回、制服検討の中で生徒対象に行ったアンケートの自由記述欄に寄せられた意見では、ベルト着用のルールの変更を求める声はあったが、ベルト自体を廃止したいという要望は決して多くはなかった。すぐに結論を出せる問題ではないが、生徒たちの声に真摯に耳を傾ける姿勢は持ち続けたいと考える。

Ⅲ. 校内の体制づくりと改訂に向けた動き

制服検討にあたって、私たちは教師主導で改訂が進むことは絶対に避けるべきであると考えていた。制服を着るのは生徒たちである。生徒たちが願っていない制服を導入した結果、誇りを持って着用できないのなら改訂の意味が薄れてしまうし、前のままの方が良かったと思われかねない。もちろん、生徒たちに全てを委ねることは難しいが、どのように関わっていくことができるかが、制服改訂の成否を握ると感じていたのは事実である。教員も生徒も一緒の方向を向いて議論できることが理想的である。そのためにはお飾りの参加ではなく、参画して協働することが大切であると考え、生徒が参画しやすいようまず、校内での体制を整えるところから着手した。

2022 年 4 月以降、本格的に生徒指導・保健安全部内で検討するにあたり、制服の変更の是非から制服を無くすことまで、選択肢は大きく広がり、様々検討すべき課題があることが明らかになった。そんな折、私たちが師事したのは本学生活文化化学講座に所属し、制服史研究を専門とする難波知子准教授である。制服検討プロジェクトチームのメンバーと難波先生の研究室を訪れ、最近の制服事情について様々なお話を聞かせていただいたことは大変貴重な経験となり、かつ、理論的な面で大いに支えになった。難波先生から、「ジェンダーレス制服を導入することが必ずしも LGBTQ の生徒への配慮につながるとは限らない。ジェンダーレス制服は一つの選択肢であり、私服や現行の制服の微細なモデルチェンジ等、様々な選択肢から選べることでジェンダーレスの目的に合っているのではないか」という言葉にも大いに示唆を与えられた。難波先生にお会いするまでは、「ジェンダーレス制服」をいかに導入するか考えていたが、もう少し広い視点で捉えることが必要であると認識をあらためた。この訪問を機に、「ジェンダーレス制服」よりも「多様性を尊重する制服」のあり方を検討することが望ましいのではと考えるようになった。また、難波先生から、制服を検討する際の枠組みとして、学校・着用者・生産者という三つの視点⁽¹¹⁾を大切にすることを示された。どこから着手すべきか模索中だった私たちにとって、明確に枠組みを提示していただいたことは、今後の進め方の指針となった。

特に生産者の視点が不十分であった私たちは、難波先生に勧められて、本校の制服を取り扱う服装店を訪問し、私たちの考えを率直に伝える機会を持った。現在の制服のデザイン、素材、着こなし方等、伝統ある制服を長年扱ってきた専門業者としての自負を感じ、私たちにとっても新鮮で学びの多い時間となった。購入者に対して、ベルトのデザインの意味や着方についても説明しているとのことであり、見えないところで支えてくださっていることが伝わってきた。可能性の一つとして、セーラーの上衣にスラックスの組み合わせの可否を訪ねたところ、前向きな回答を得ることが出来、試作品の作成も請け負っていただくこととなった。

2022年7月には生徒指導・保健安全部が主導して教職員の研修を開いた。難波先生にご紹介をいただき、被服心理学を専門とするお茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特任講師の内藤章江先生をお招きすることができた。内藤先生は2020年度より愛知県一宮市における公立中学校（全19校）の新制服導入のプロジェクト⁽¹⁾に関わるなど、制服改訂の経験が豊富である。自身の専門である被服心理学の側面から制服の役割やジェンダー問題等についてお話をいただいた。内藤先生の講演の後、小グループに分かれて教員同士で制服について話し合う機会を設けた。教員の中でも制服に対する思いや考え方は、本校での在職期間、自分の学生時代の経験、出身の地域性等でかなり異なる。改訂の必要無しという意見から、男女共用のブレザータイプ、セーラー服にスラックスを組み合わせるタイプ、さらに本当に多様性の尊重を大切にすれば私服であるべき等、様々な意見が出された。それでも内藤先生の講演以降、教員の中にもジェンダーへの配慮について一定の合意がなされたように感じる。

また、7月の末には第1回目の保護者アンケートを実施した。アンケートには様々な意見が寄せられたが、おおむね学校側の取り組みに対しては前向きに受け止めてくださっていると感じた。（表1）

他校の制服検討に関わった経験のある難波先生、内藤先生とも共通して言われ、印象に残っているのは、「制服改訂は、どんな結論になっても全員が満足することにはならない」という言葉である。教員も保護者も、かつては制服に身を包み、学生生活を送ってきた経験がある。制服に対する思いは生徒だけではなく教員、保護者とも個人個人で大きく異なり、一致することはあり得ない。ただ、一人でも現行の制服に着づらさを感じている生徒がいるのであれば、検討を進めるべきであるというのが私たちの考えである。一方、制服検討はかなりの時間、労力を要する大きなプロジェクトとなる。生徒指導・保健安全部が全て抱えるよりも、専門に検討する組織が必要であると考えた。内藤先生が関わる愛知県一宮市の制服プロジェクトの進め方を参考に、生徒指導・保健安全部という一分掌が担当するのではなく、組織を立ち上げて、多くの人を巻き込む形が目標に近づくと考え、制服検討委員会の創設を提唱し認められた。図3はその組織図である。2022年9月以降は、各分掌主任が兼務する形で、制服検討委員会を中心に検討を進めることができた。

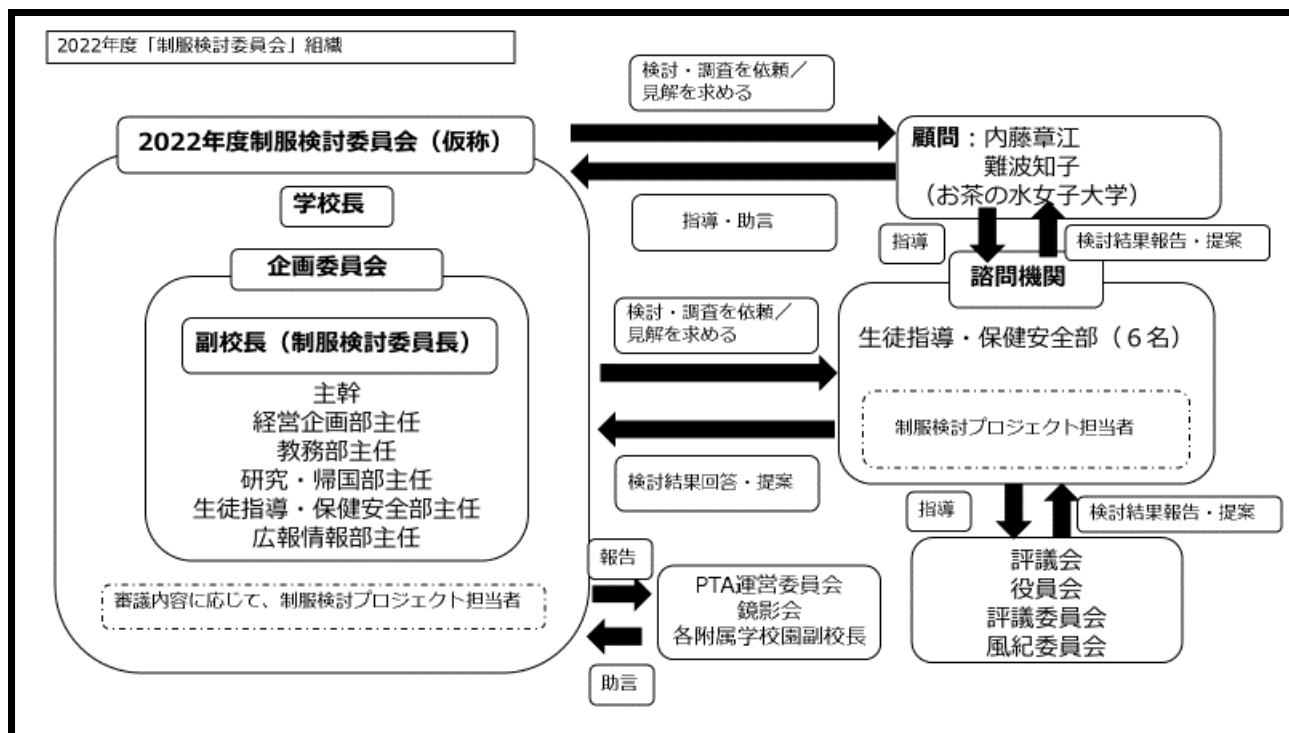


図3 制服検討委員会組織図

IV. 「制服のあり方について考える週間」の設定

2022年7月以降、教員間で本格的に検討する中、「まず改訂ありきではなく、本校の制服の歴史をよく理解した上で検討すべきではないか」「生徒自身が自ら考えられる時間を確保したい」という意見が話し合いの中で上がった。

これを受けて、10月の夏服・冬服移行期間に合わせ、10月最初の一週間を「制服のあり方について考える」週間と位置づけ、様々な視点で生徒自身が制服への意識を高め、自分事として制服について主体的に考えられるような機会を持った。制服着用のルールに則って服装面でも自らを律することを自覚させるとともに、制服に関わる授業やイベントを集中的に設定した。

まず、難波先生より、確認できる最も古い大正5（1916）年のベルトと徽章をお借りして、1週間朝生徒が登校するエントランスに展示した。生徒たちは現在の自分のベルトと比べるなど、興味を持って話し合う場面が見られ、少なからず印象深く思っているようであった。また、同時に図書室司書に依頼して、図書室内に制服やジェンダーに関わる書籍や新聞記事を集める特設コーナーを設置した（図4）こちらも多くの生徒が関心を寄せるきっかけとなった。



図4 図書室の特設コーナー

また、美術科の授業では、「理想の制服を考える」というテーマで制服のデザインを考える取り組みを行った。完成した作品を廊下に展示し、誰もが鑑賞できるようにした。特に制服を着用する期間が短い1年生にとって、主体的に制服について考える機会となったと感じる。

さらに、隣に位置する筑波大学附属中学校の生徒会執行部の生徒を招き、本校の役員会生徒と制服や

校則について意見交換する交流会を開いた。通学路が同じ近隣の学校であり、また、同じ国立大学附属の中学校である等、共通項が多くあるものの、今まで生徒会レベルでの交流はほとんど持たれていなかった。今回の交流会のテーマである制服も両校とも類似した制服を着用しているが、実際に話してみても新たに気づく部分が非常に多く、互いに興味深く感じていたようであった。本校生徒会長により、ここまでの制服検討の流れをまとめたプレゼンテーションがなされ、それに対して筑波大学附属中学校から多く質問が寄せられるなど、大変活発な交流会となった。役員会生徒たちにとって、自分たちの取り組みが評価されたことは大変自信となったのではないかと感じる。

全校生徒に対しては、「心と体に心地よい制服とは」というテーマで筆者が道徳の指導案を作成し、3学年一斉にクラス担任が実施した。以下、実際に行った学習指導案の概要である。指導案作成にあたっては、色々な視点で制服について考えられるよう、本校の制服の歴史や伝統から、制服に関わる近年の動き、例えば、男女の制服を入れ替えてジェンダーの問題を考える取り組みをしている学校、伝統的な制服を廃止した学校、スラックスを男女とも共通の標準服としてスカートを選択できる学校等を取り上げた。参考資料として、各学年の生徒たちの振り返りの一部を示す。「制服のあり方」は時代とともに変化するものである。ただ、そこには在籍していた生徒たちの意思が存在する。考えた上、生徒たちが望ましいと考える判断を尊重することが大切であるし、それができるだけ十分な判断力が備わっているとあらためて感じさせられた。

第1～3学年道徳

2022年10月5日

「心と体に心地よい制服とは」

担当：寺本

1. 日時：2022年10月5日（水）6限
2. 主題：「心と体に心地よい制服とは」
3. 内容項目：C-（15）「よりよい学校生活・集団生活の充実」
4. 指導目標：伝統を受け継ぎ、次の世代に伝えるためにできることを、制服を通して考え、学校の一員としてよりよい校風をつくっていかうとする心情を育てる。
5. 主題設定の理由：

本主題は、内容項目 C15 「よりよい学校生活、集団生活の充実」として、「これまでの先輩や保護者、地域の人々の長年の努力によって培われた学校独自の校風を、後輩たちが協力し合って継承し、さらに発展させよりよい校風づくりをしていくこと」をもとに設定したものである。

集団生活が充実するためには「自分の属する集団の意義や目指す目的を十分に理解し、自分の役割と責任を果たす」ことが必要である。長い歴史を持つ本校の制服、そして本校の制服であることを示す徽章の意義について知ることを通して、伝統の継承と発展を担うために、自分には何ができるか考えさせたい。制服のあり方はその時代の状況によって変化するのが自然である。ただ、変化に対して傍観的な立場に立つのではなく、自ら主体的に考え、意思決定することが、「自主・自律」の学校教育目標に沿うのではないだろうか。自分、仲間、そして、今後、伝統を継承する次の世代の生徒たちにとっても心地の良い制服のあり方を考えさせたい。

6. 展開案

	展 開
--	-----

<p>14:20 ～ 14:30</p>	<p>①「まず、こちらの写真を見てください。」(スライド2)</p> <p>②男女の制服を入れ替えている高校生の取り組みの様子の写真を見せる。</p> <p>③「これはある高校の取り組みの様子です。なぜこのような取り組みを行っていると思いますか」</p> <p>④「このような取り組みを見て、どのように思いましたか。」</p> <p>⑤自由に意見を述べさせる。</p> <p>⑥「この高校では、生徒自身の発案で、「男らしさ」「女らしさ」を離れて自分や社会を見つめ直すことを目的とし、希望者約300名の生徒が1日だけ男女の制服を入れ替えるイベントを行いました。これは実際に行ってみた生徒の感想です(スライド2)。皆さんはどのように感じましたか。</p> <p>現在、様々な理由で、制服のあり方を考え直す取り組みをしている学校が全国で多く見られます。お茶中でも、7月に保護者対象にアンケートを行い、制服について保護者がどのように考えているのか尋ねました。今度は生徒の皆さん自身にもアンケートを行いたいと考えています。アンケート項目は役員会の生徒が中心になって考えてくれています。ただ、お茶中の制服は長い伝統を持ち、卒業した先輩方の様々な思いが込められています。「着心地の良さ」だけを考えて、変えればよいというものではありません。制服について真剣に考えた上で、皆さん一人一人が責任を持って決定する必要があります。今日は制服のあり方について考えてみましょう。」</p>
<p>14:30～ 14:40</p>	<p>⑥様々な制服を見直す動きを紹介し、なぜこのように制服のあり方を見直しているのか、考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・岐阜県立加納高等学校 1925年(大正14年)セーラー服を制服にしたが、今年から制服の着用義務を廃止した。(スライド3)(参考資料3) ・姫路市立山陽中学校 スラックスを標準として、男女とも「スカート」選択制導入(スライド4) <p>⑦「このようにここ数年全国で制服についての検討が進んでいます」「皆さんが着ている制服は、いつから始まったか知っていますか。」</p>
<p>14:40～ 14:50</p>	<p>⑧「これは学校生活のしおりに書かれている内容です(資料2 ※配布用資料)。(スライド4～15)</p> <p>制服の歴史を研究している本学の難波知子先生から大正5年のベルトお借りしています。現存する最も古いベルトです。大変貴重な資料ですが、今日の授業のために難波先生がぜひ中学生にと、貸してくださいました。エントランスに展示しておきますので、ぜひ見てください。</p> <p>なお、男子の制服の学ランは、当時の洋服＝オランダの服＝「蘭服」からきています。東京帝国大学が1886年(明治19年)に初めて制服として定めたとされています。その形は黒の詰め襟に金ボタン。陸軍下士官をモデルに作られました。」</p>
<p>14:50～ 15:05</p>	<p>⑨このように本校の制服には長い歴史が刻まれています。今の制服は皆さんにとってどのような存在でしょうか。「心地よい」とは、デザインや機能性だけではありません。「伝統」を感じながら制服を着ることも「心地よさ」につながるのではないのでしょうか。</p> <p>今まで見てきたように、生徒自身が議論したり、提案をしたりして、自分たちにとってどんな制服がよいか決めている学校が多くあります。大切なのは、制服を実際に着る皆さん自身の気持ちであり、皆さんの後輩たちにどんな制服を引き継ぎたいかという思いです。ですから、一時の気分に流されず、お茶中の制服としてどのような制服のあり方がのぞましいか皆さんには真剣に考えてほしいです。</p>

	⑩「皆さんはお茶中生としてどのような制服のあり方が望ましいと考えますか」（約15分間）話し合いの方法や共有の仕方は各クラスの裁量でかまわない。
15:05～ 15:10	⑪「制服には、それぞれの歴史があり、色々な思いが込められています。ただ単に学校に行く時に着なければいけないもの、と片付けずに、その背景にあるものを、考えてもらい、制服のあり方を見直してほしいと思います。」 ⑫formを通して振り返りを書くよう指示。

【道徳授業『心と体に心地よい制服とは？』を振り返って】

・自分が好きなように、自分なりに選べるほうがいいなと思いました。今のようにみんなが同じ制服を着て揃えるという方がきれいに見えるかも知れませんが、心のなかではやはり自由に過ごせないという思いを感じている人も多いと思います。自由に選択肢を増やすことによってより自分らしさが生まれ、楽しく学校生活を送れる準備の一步になると思います。統一性がないからこそみんな違ってみんないいと思います。だからといって、制服をなくして自由服だけにしてしまうというのはちょっと嫌だと思いました。なぜなら、制服はその学校の印象や象徴にも関わってくるかと思うからです。制服という存在はなくなり、もっと選択肢を増やしてより生活しやすくなってほしいです。（1年）

・お茶中のベルトの意味など、制服の歴史について知ることができ、ベルトの印象も少しだけ変わった。伝統も残しつつ、新しい制服に変わって行く必要があると思った。だが、伝統があっても男女決められた制服を着るのは違うのではないかと思う。男子は学ランを着て、女子はセーラー服を着るのが当たり前にはしたくないと思った。男だからこうあるべき、女だからこうあるべきなどの固定観念に囚われず、自分が着やすい服を自分で考えて選べるようになりたい。お茶中生ひとりひとりが着心地が良いと感じる制服に新しく変えていきたいと思った。（1年）

・初めの頃の着物や袴の時代からどんどん時代に合わせて移り変わっていったことがわかりました。私達は昔の制服を着たことがありません。なので、着物や袴がどれほど重かったのか、動きにくかったのか、そしてどれほどの思いで先輩たちが頑張って、制服のルールを改革したのかは知りません。ですが、今の制服を着ている身から考え、意見を出しあったことはとても有意義だったと思います。私は今回の授業で先生の話聞いたあとにクラスで意見交換をして、スラックスを導入したいという意見が多いなと思いました。私もスラックスのほうが動きやすそうなので賛成ですが、ベルトは生徒の希望で学校設立当初から現代まで残ってきたものなので少し形を変えてでも残したほうが良いと思いました。（2年）

・今回、初めてこんなにも制服について知り、考えました。制服の歴史がこんなに長くて、意味が込められていたことに驚きました。色々な学校の制服を見て、その学校のスタンスや考え方が少し表されているのかなと感じました。また、時代の流れに合わせたジェンダーの関わりを感じました。女子はスカート、男子はズボンといったような固定的なものだけではなく、互いに互いの制服や着心地を知り、個人の好きな形を選べるようにしたら良いと思います。なので、まず制服について知ることが最初に必要だと思います。せっかく、制服があり、学校の伝統の1つとして受け継がれてきたものなので、制服を無くしたりせずに、制服のバリエーションや選択肢をもっと増やすと良いと考えました。制服は制服の必要性や意味があるので、それを消さずに個人の好きな着たいと思えるような仕組みになっていくと良いのではと思います。心地よいというのは、心的には嫌ではない、自分にあったものを、体的には動きやすくて、サイズ感が合った最適なものを選ぶことを意識して着たいと思えるようなものにしていくことが大切だと感じました。制服について、これからの学校生活と繋げ、また考えていければいいなと思います。（2年）

・やはり、女子大学のため女子の制服の歴史はたくさんあったが、男子の制服にも歴史があるということは

少し驚いた。普段着ているのはエリートを意識していると知り、帰ったら学ランをよく見たいと思ってしまいました。女性も対象時から令和までとどんどん進化していき今の姿になったということも学びました。普段の生活の中で女子の制服を着る機会など普通はないのでこういう授業で学べるのは良い機会だとも思いました。そして、教室内の話の中で出てきた、制服はあっていいのかという事があったが僕的にはあるという意見に賛同しました。やはり、私服登校なども悪くはないが制服は学校の象徴とも言えるようなものなのでなくさないほうが良いと思いました。(2年)

・お茶中のベルトが歴史のあるものだということや、昔は制服がなかったことについて知れました。お茶中のベルトは歴史があるもので、なかなか変えにくいというのものもあるかもしれませんが、今の時代に合わせたり、ベルトがあることのメリットだけでなくデメリットがあることも考えて、今後ベルトをどうするのかを考えても良いのかなと思いました。また、今スラックスなどの導入をしている学校があるように、色々な種類の制服を選べるようにしても良いと思いました。制服は、毎日多くの服の中から着ていく服を選ぶ必要がないので便利だと思います。ですがそれを着ることで男女差などがでてしまうとなると「制服が便利だ」とは言えなくなると思うので「男子はズボン、女子はスカートかスラックス」という定義をなくすべきだと思いました。色々な考えがある以上、多くの人々が納得いく制服は難しいのだなと思いました。(3年)

・制服が時代の変化に連れてベルト以外自由だったり、セーラー服が体操服だったりだんだん見た目や形式が変わっていったとわかりました。今のベルトが当時の生徒が望んだことで残ったということにはびっくりしました。私達が今の制服を変えるにあたってはお茶中を卒業した人たちにとっても納得できるような制服にしなければならないと思いました。ただ自分たちがこうしたいからと言って変えられるような軽く考えるものではなく今までのお茶中の人を思って変えたいです。ただ、現代はジェンダー差別をなくすことが大切で他の中学校ではもうスラックスを基本としたり男女の制服を入れ替えてみたり色々な取り組みがあってお茶中もそれにならってほしいと思いました。伝統、ジェンダーや利便さなどを折り合いをつけて今できる最善の制服になって欲しいと思います。(3年)

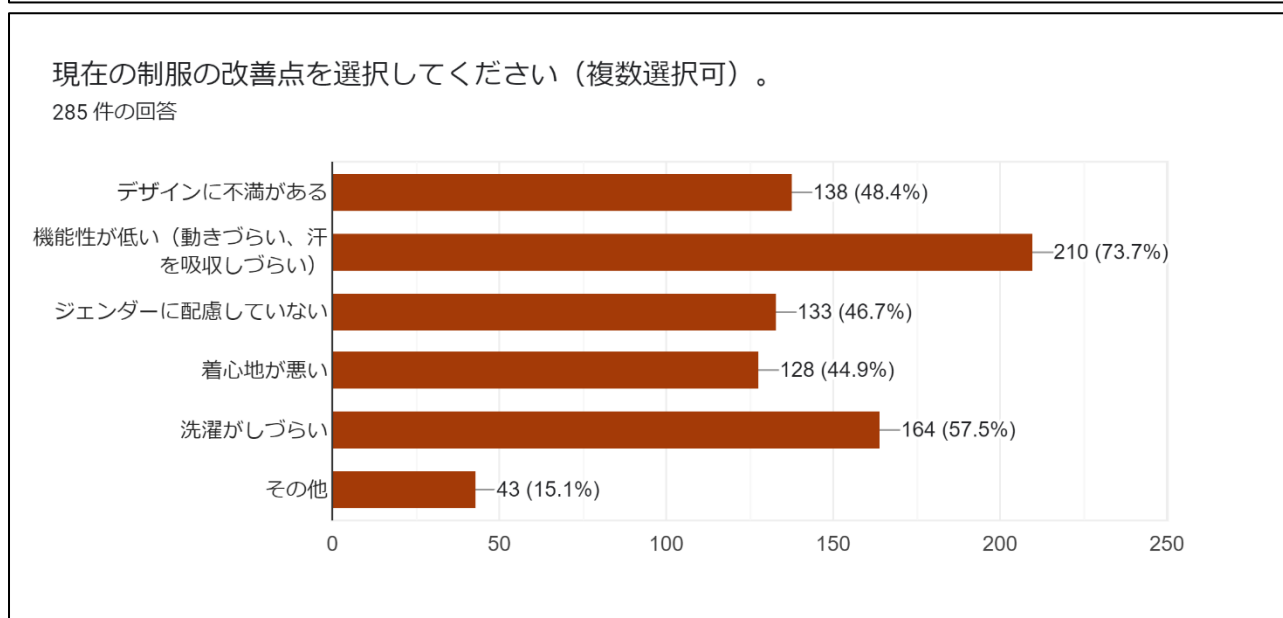
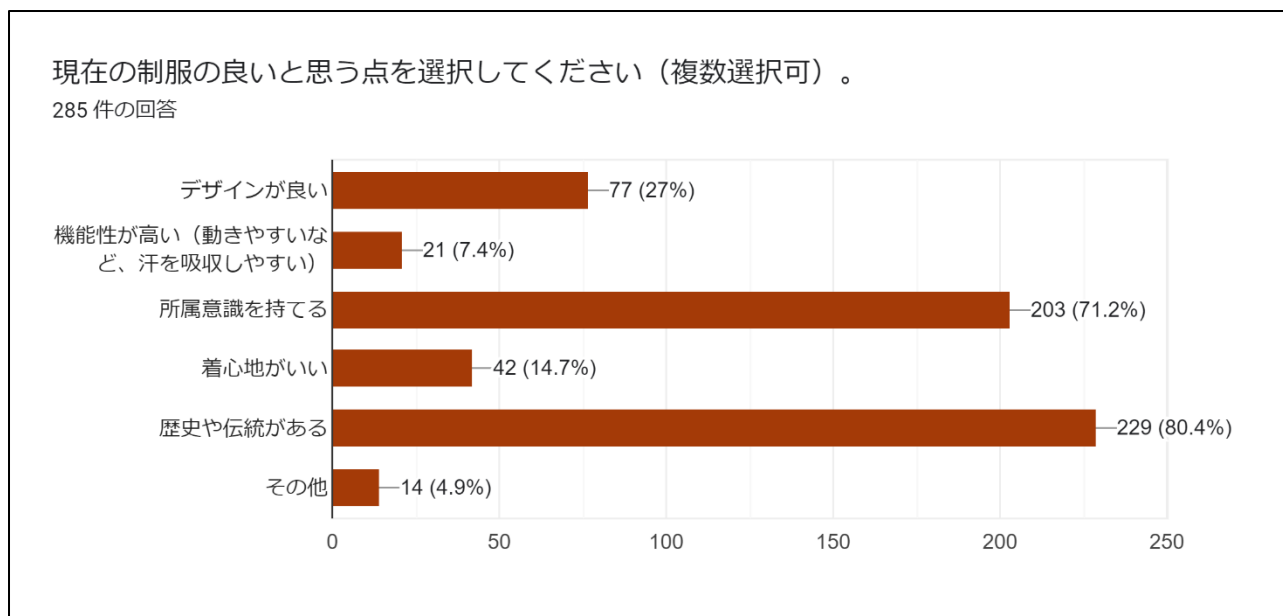
V. 役員会を中心とする制服選択制への動き

制服改訂の推進役となったのが、生徒会の役員会メンバーである⁽¹³⁾。先に述べたように、第73期役員会(任期2020年11月～2021年10月)の時に初めて、ジェンダーレス制服に関する全校生徒へのアンケートが実施され、役員会にとって取り組むべき大きな課題として認識された。本格的に検討を進めたのは第74期役員会(任期2021年11月～2022年10月)及び第75期役員会(任期2022年11月～2023年10月)である。

(1) 第74期役員会の取り組み

2022年7月より定期的に制服のあり方について議論し、10月に第1回目の生徒対象アンケートを実施した。生徒たちがまず選択肢の案を出して、役員会顧問教員がアドバイスしながら生徒たちが本当に聞きたいことは何か焦点を絞っていくよう促した。最終的には職員会議で確認後、生徒たち自身でアンケートフォームを作成して、各クラスに訪れてアンケートの趣旨説明と協力依頼を行った。以下、表1に結果を示す。このアンケートでは、制服の検討にあたって良い面と改善点を集約し、どんな点に重点を置いて提案するべきか確認することができた。全校アンケートに先立ち、役員会、評議員会にて意見を収集したり、話し合ったりした感触から、まず現在の制服の良い面と改善すべき面に関する意見を収集し、全体の意見の傾向を掴むことを考えて実施した。

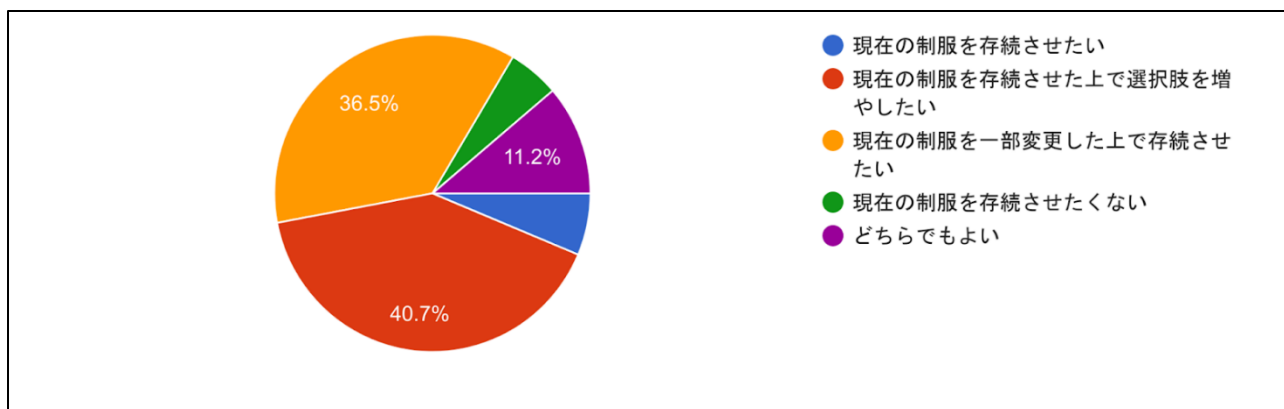
表1 第1回アンケート結果



第2回目のアンケートは第1回目の翌週に行った。役員会としては制服の廃止よりも制服の改善や選択肢を増やすことで、課題が解決されるのではと予想して臨んだ。

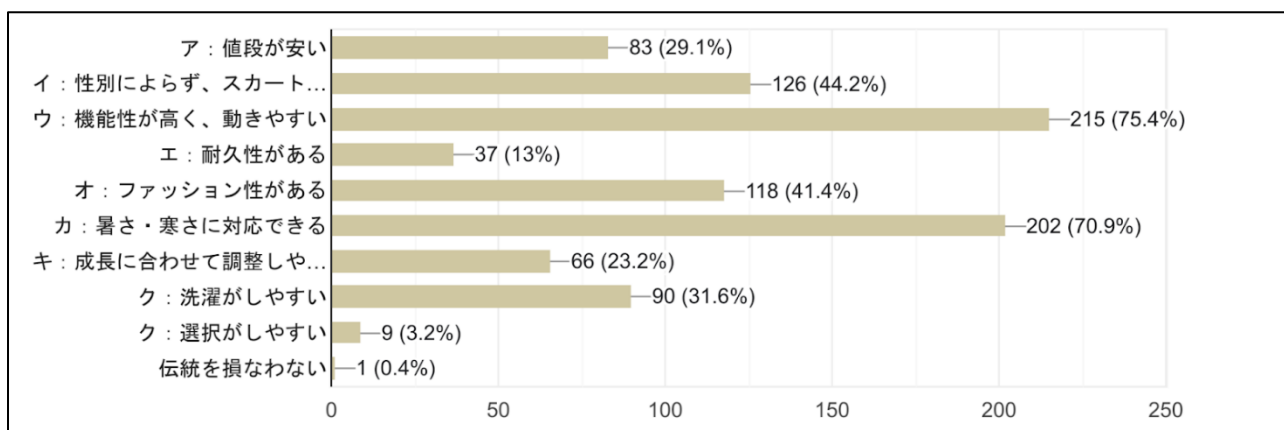
アンケート結果を見ると、「現在の制服（学ラン・セーラー服）を今後も存続させる」ことについて尋ねた質問では、約8割の生徒が制服の存続を希望することが明らかとなった。最も多い40.7%の生徒が「現在の制服を存続させた上で選択肢を増やしたい」を選んだ。選んだ理由としては、「制服か自由服を選択できるようにしたい」「スカートかスラックスかを選択できるようにしたい」が多く挙げられていた。また、2番目に多い36.5%の生徒が「現在の制服を一部変更した上で存続させたい」となり、制服の機能性の改善や着用のルールについての意見が多く集まった。（表2）

表2 「現在の制服（学ラン・セーラー服）を今後も存続させる」ことについて、今のあなたの考えを一つ選んでください。



次の「もし制服を変更するなら、何を重視しますか」という質問への回答を見ると、ウ:機能性が高く、動きやすい イ:性別によらず、スカートやスラックスが選べる カ:暑さ・寒さに対応できるという順で意見が集まった。(表3)

表3 もし制服を変更するなら、何を重視しますか。次の中で最も重要だと思う項目にチェックを入れてください。(3つまで複数選択可)



この2回のアンケート結果を受けて役員会は、2022年11月の新旧役員引継ぎの場にて今後の方針として、現在の制服を存続させつつ、ジェンダーへの配慮を推進していくことが発表された。さらに具体的には、①学ラン・セーラー服着用の選択肢を増やす ②新しいアイテムの導入を目指す(女子スラックス等) ③長期計画で新たな制服の在り方を考案していくことを次の役員会に引継ぎ、任期を終えた。

(2) 第75期役員会

第75期役員会では、第74期役員会の取り組みを引き継ぐ形でさらに制服検討を加速させていった。まず、就任早々に多様に配慮した制服を今後実現するにあたって、学校生活の中でその制服で不自由がないかどうかを確かめるために、役員会のうち代表4名が現行の男子用、女子用の制服のパターンを変えて着用し生活する、という取り組みの要望書を提出し、職員会議でも了承され実現した。

具体的には、上半身をセーラー服もしくは学ランから、下半身をスカートもしくはズボンから自由に選択することができる可能性を検討するため、①セーラー服にズボン②学ランにスカートの組み合わせを約1週間着用して過ごすというものである。ただ単に、選択肢を増やすことを要望するのではなく、実際に着用してみて学校生活、例えば、体育の着替えや清掃・休憩時間など、席に座って授業を受けるだけでは分からないことを自ら体験しながら検証しようとする取り組みは、生徒ならではの発想であり、大変意義深いものである。また、一般生徒に対するインパクトも大変大きいものであ

た。様々な学校生活の場面で、普段とは異なる組み合わせで制服を着用する仲間を目にすることで、役員会が強い覚悟を持って取り組んでいる姿を印象付けるとともに、他の生徒自身も実際に導入されて自分が着用したら、友達が着用したらと想像することを通して関心を高め、制服のあり方を自分事として捉えるきっかけになったのではないだろうか。また、教員にとっても、選択肢を増やすことになった場合の周囲の反応や、それを受けての対応は当然準備しなければならないが、試着期間を通してかなりイメージできたと感じる。実際に、「違和感がなかった」という教員の声を何度も聞くことがあった。自ら普段とは異なった組み合わせを着用したいと申し出て検証しようとする役員会メンバーの熱意は、間違いなく制服検討を大いに前進させたと考える。

表4～8は、試着期間を受けて、全校生徒対象に行ったアンケート結果である。「多様性を尊重するために制服について男女関係なくズボンやスカートを選べるようにした方が良いと思いますか」という質問に対しては、とてもそう思う 56.9%、ややそう思う 38.4%となり、実に95.3%の生徒が賛成となった。「セーラー服＋スラックスの組み合わせを、制服の選択肢として増やすことに賛成しますか」という質問に対しては、・賛成する 54.5% やや賛成する 25.5%となり、合わせて80%の生徒が賛成の意思を示した。その理由として、「多様性に配慮されているから」が最も多く87.1%の支持を集めた。

一方、「学ラン＋スカートの組み合わせを、制服の選択肢として増やすことに賛成しますか」という質問に対しては、「賛成する」、「やや賛成する」を合わせて60.4%、あまり賛成しない、全く賛成しないを合わせて39.6%となり、セーラー服＋スラックスの組み合わせに比べると、大幅に賛成する割合が減った。賛成する理由としては「多様性の尊重」が最も高かったが、反対する理由として、「デザイン性の悪さ」が最も高い割合を示していた。自由記述の中でも伝統や学校のイメージを壊すことや、機能的とは言えないなど、実際に着用する生徒からすると、着心地の良い制服には感じられなかったと言える。

役員会ではこのアンケート結果を受けて、全校生徒に対して「セーラー服とスラックスの組み合わせ」を新たな制服として導入することを学校に要望すると発表した。教員もこのアンケート結果を踏まえて検討し、校長からの正式発表に繋がったのは冒頭で述べたとおりである。

導入することが決まったものの、試着期間中に役員が着用していたのは、他校で導入していたスラックスを制服取り扱い業者から借り受けたものであり、セーラー服と組み合わせることを前提としたものではない。また、店舗に余っていたものを借りているので、サイズが合っておらず、学校生活を送る上では困難があった。セーラー服に合わせやすく、そして、体形の違いも考慮した理想のデザインを求め、本校家庭科教師の指導の下、実際にスラックスの試作品を製作することに取り掛かった。役員会の中でも「制服プロジェクト」として7名の生徒が立候補し、集中的に制服検討に取り組むこととした(図5、図6)。2023年4月には生徒会長が試作品を制服取り扱い業者に持参し、着用者としての要望を伝える機会を持つことができた。2023年5月にはその試作品を着用して、希望する保護者、同窓会を対象に、「お茶中スラックス先行お披露目会」を開催し、直接制服選択制に向けた自分たちの思いを伝える予定である。

表4 「多様性を尊重するために制服について男女関係なくズボンやスカートを選べるようにした方が良いと思いますか。」

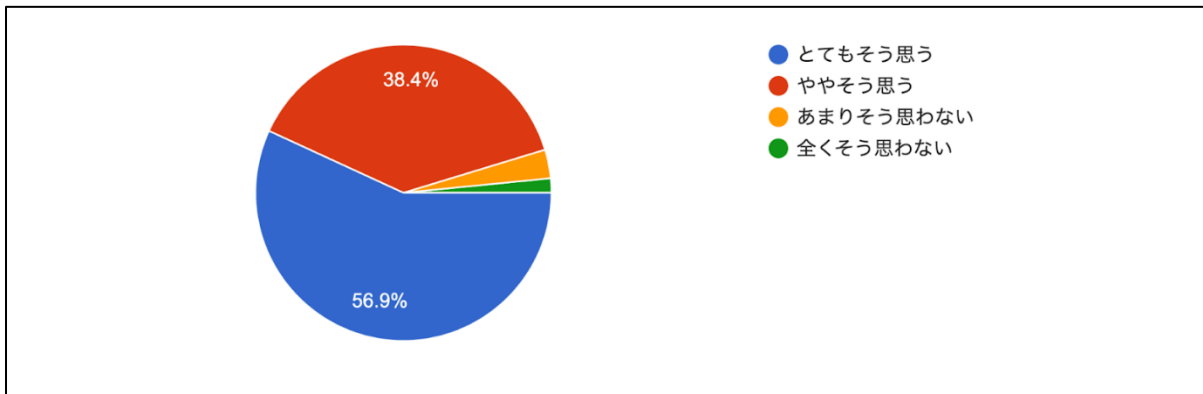


表5 「質問 2-1 セーラー服+スラックスの組み合わせを、制服の選択肢として増やすことに賛成しますか。」

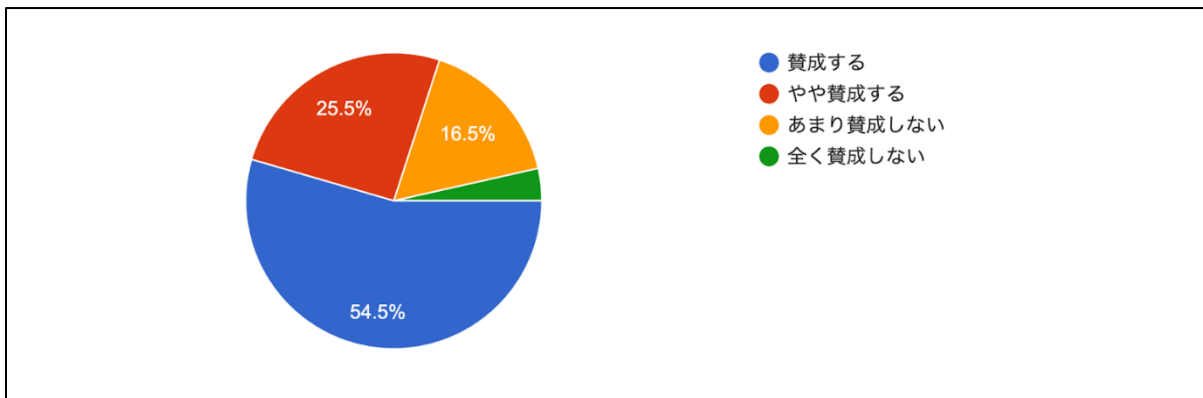


表6 「上記 2-1 の質問で「賛成する」「やや賛成する」と回答された方に質問です。なぜそう考えるのですか。」

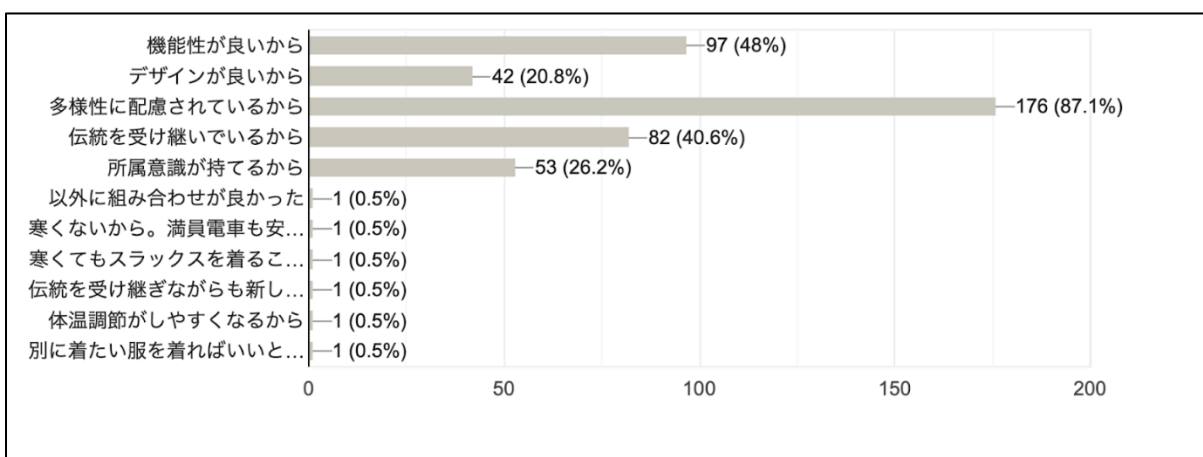


表7 質問 2-2. 「学ラン+スカートの組み合わせを、制服の選択肢として増やすことに賛成しますか。」

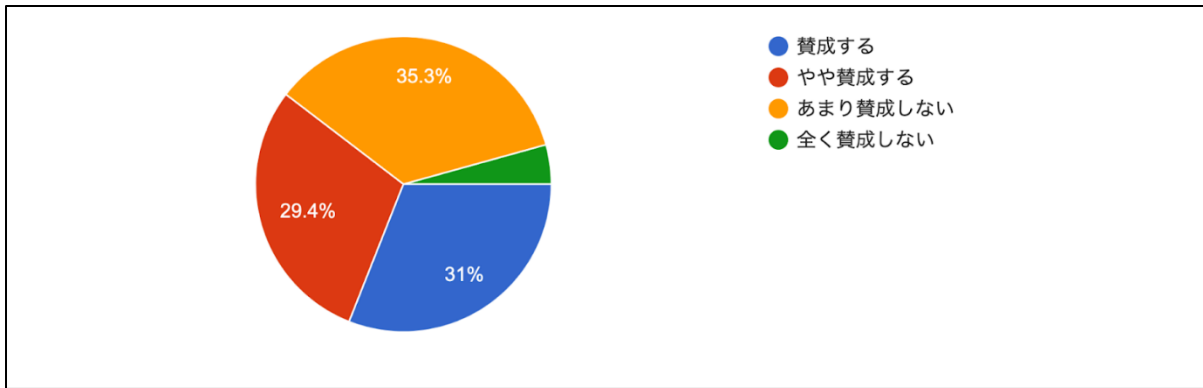


表 8 質問 「上記の質問 2-2 で「賛成する」「やや賛成する」と回答された方に質問です。なぜそう考えるのですか。」

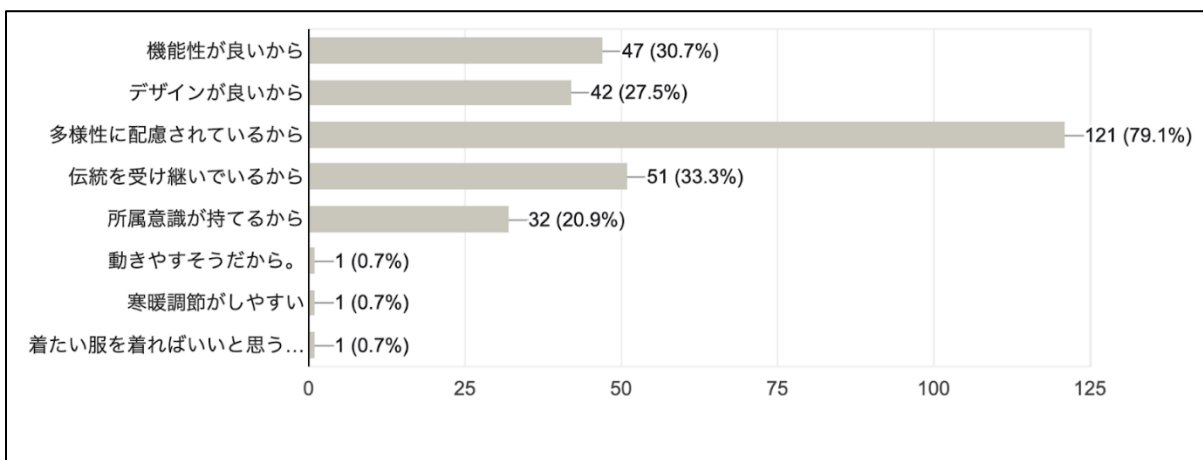


表 9 質問「上記の質問 2-2 で「あまり賛成しない」「全く賛成しない」と回答された方に質問です。なぜそう考えるのですか。」

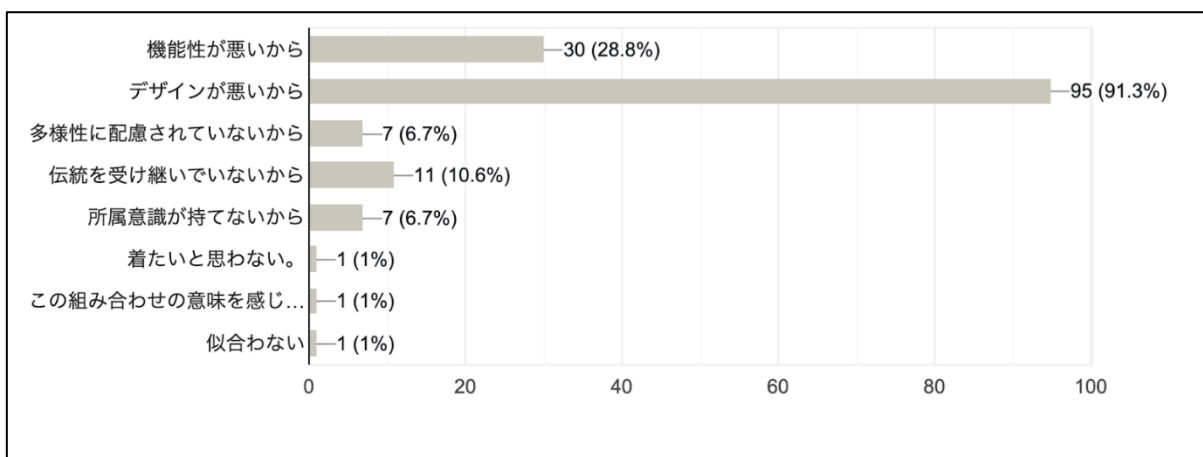




図5 完成した試作品のスラックス



図6 製作している生徒の様子

VI. 保護者対象アンケート結果のまとめ

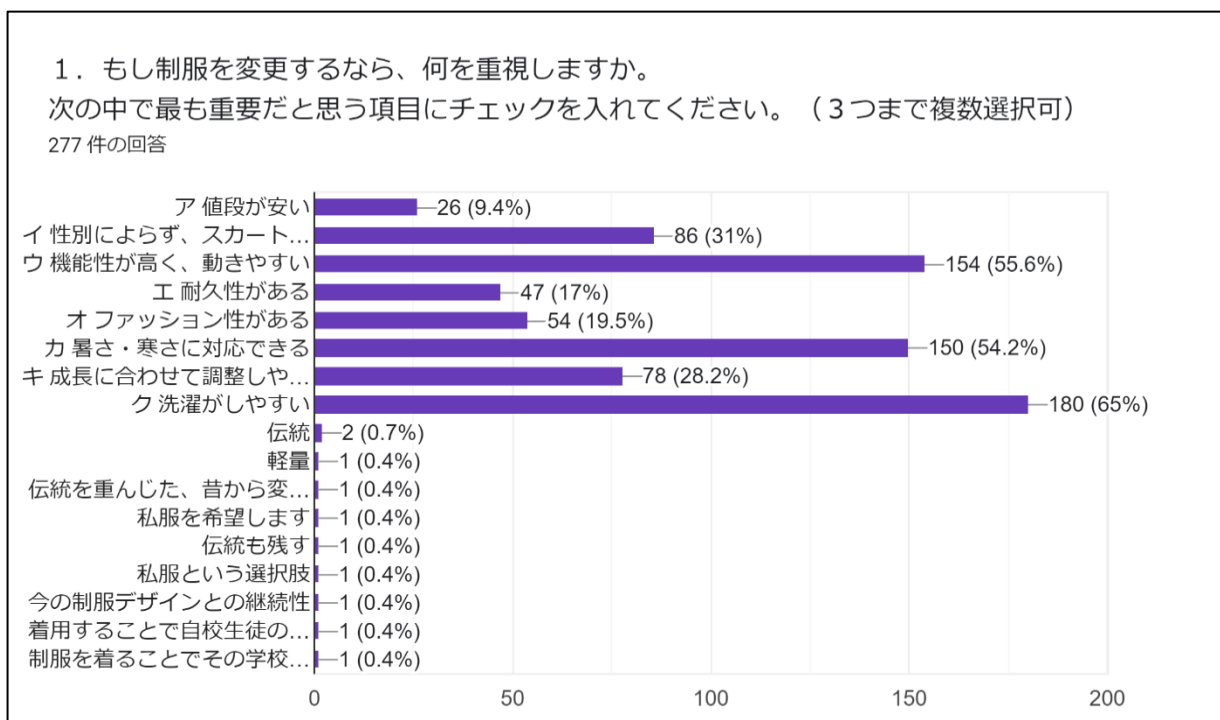
中学生にとって、保護者の意見も選択において大きな影響を持つ。生徒たちの活動に合わせて、保護者へのアンケートを2回実施した。第1回目のアンケートは7月、第2回目は3月に実施した。

(1) 第1回保護者アンケート

第1回目の結果は表 10～12 で示した通りである。

問1の「もし制服を変更するなら何を重視しますか」という質問に対しては、「洗濯のしやすさ」を重視する意見が最も多かった。その他、「機能性」や「寒暖差への対応」を重視する意見が多くなっており、生徒のアンケート結果と同じ傾向を示していることが分かった。

表 10 「もし制服を変更するなら何を重視しますか」

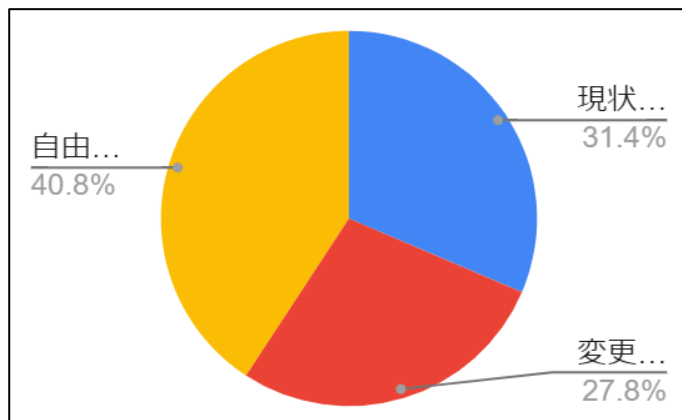


問2の「現在の本校の制服についてご意見がありましたらお書きください」という質問については、現行の制服について、制服を維持することを希望する意見・変更希望の意見ともほぼ同数で、有意な差は認められなかった。自由記述を見ると、伝統やお茶中生としての統一感を大事にしたいという声が多かった。ただ、制服制度は維持しつつも、素材を含め寒暖差の対応など、現行の中での改変を希望する意見は多く寄せられており、改良を希望する声は多いと判断できた。

問3の今後、本校の制服の検討を進めていく上で、「多様性を尊重する制服のあり方」について、ぜひご意見をお聞かせください。

問3「多様性を尊重する制服のあり方」について、ぜひご意見をお聞かせください。」という質問について、現行の制服は肯定するが、選択肢を増やすことで多様性にも対応することを希望している保護者が多いことが分かる。全体を通して、ジェンダーへの配慮というよりも、寒暖、洗濯への対応など、素材面や機能面の部分での改良を求める声はかなり多いことが分かる。特に吊りスカートについては、現行の制服を支持しながらも改良を求める声が多いことが分かった。

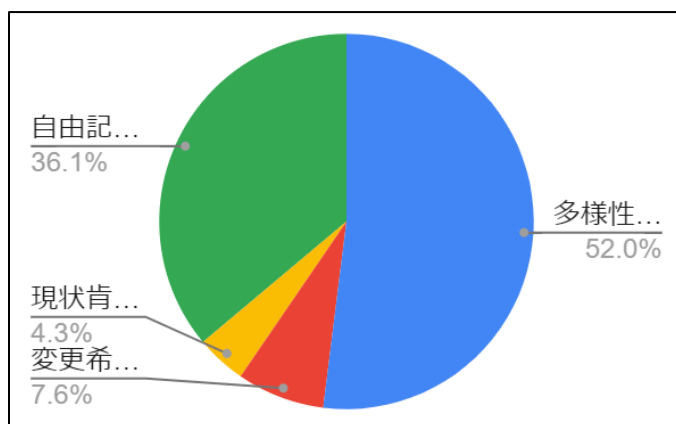
表11 現在の本校の制服についてご意見がありましたらお書きください。



現状肯定1	87
変更希望2	77
自由記述なし0	113
	277

※問2について、何も記述無し・特になしは0で分類した。現行の制服維持を希望していると考えられる自由記述は1、現行の制服について何かしら意見がある場合（ベルトを含め）は2とした。

表 12 今後、本校の制服の検討を進めていく上で、「多様性を尊重する制服のあり方」について、ぜひご意見をお聞かせください。



多様性尊重3	144
変更希望他2	21
現状肯定1	12
自由記述なし0	100
	277

※何も記述無し・特になしは0で分類した。現行の制服維持を希望していると考えられる自由記述は1、変更希望や意見がある場合は2とした（衣替えや自由服の意見も含め）。

(2) 第2回保護者アンケート結果（1・2年生保護者対象）

第2回目のアンケートは、生徒へのアンケート、教員の検討を踏まえて、現行の伝統的なデザインを生かしつつ、制服の上下の組み合わせの選択肢を増やすということを第一に考え、選択制を導入することを明らかにして意見を求めた。選択制とは、現行の制服の組み合わせを、男子用・女子用の区分をなくし、以下のA～Cの3つのタイプから選択できるようにしたものである。それを踏まえて、質問1～3に関するアンケートを実施した。

【選択できる3つのタイプ】

Aタイプ 冬：学ラン＋スラックス 夏：校章Yシャツ＋スラックス

Bタイプ 冬：セーラー＋スカート 夏：セーラー＋スカート

Cタイプ 冬：セーラー＋スラックス 夏：セーラー＋スラックス

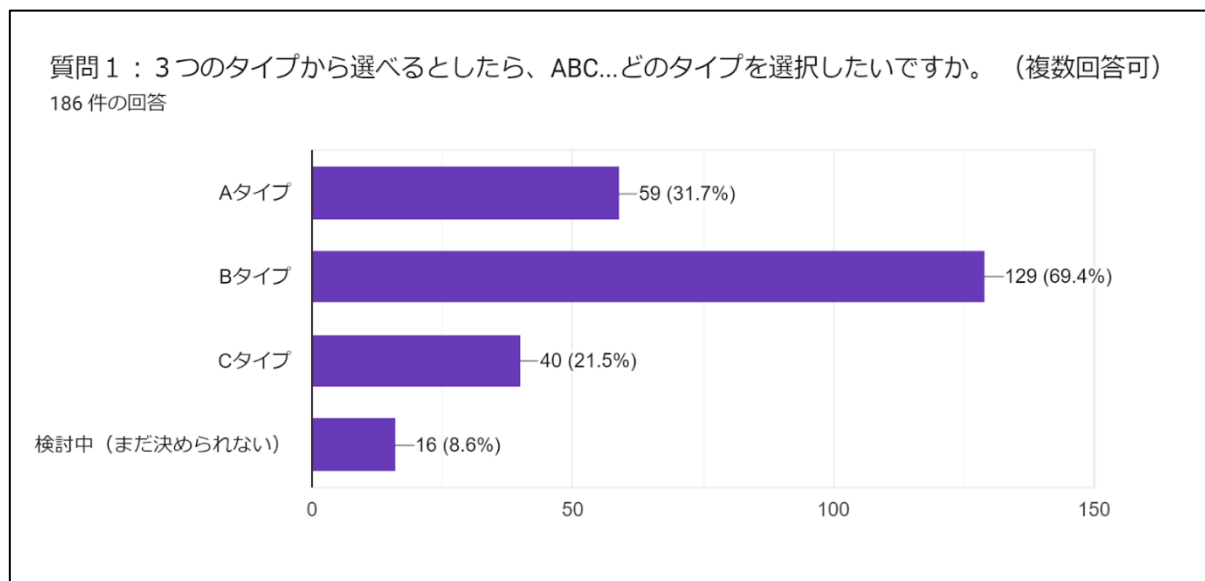
質問1：3つのタイプから選べるとしたら、ABCのうちどのタイプを選択したいですか。（複数解答可）

質問2：来年度から、3つのタイプの制服から選択できるようにすることについて、ご質問やご提案等がありましたらお聞かせください。

質問3：多様性を尊重する学校づくりの視点から、来年度も制服検討委員会を設置して、今後の本校の制服のあり方について検討を続けていく予定です。つきましては、今後の制服のあり方についてご意見をお聞かせください。

質問1については、新しく導入するCタイプの制服に対して40名の希望があった。（表13）アンケートを実施した時点はまだ保護者に試作品を披露していない段階であるが、それでもこれだけ希望があることを受け、あらためて制服検討の意義を感じる事ができた。

表 13



質問 2 については、選択肢が増えることを肯定的に捉える意見が多かった一方で、男子の選択肢の少なさや、自由に選べるとしても、自分が自認する性が確立していない時期に男女を象徴する制服を選べるのか、という指摘もあった。また、セーラーを男子が着用しても抵抗のない、スカーフやネクタイタイプの導入や、ベルトの代わりに徽章の着用を求める等の提案もあった。

質問 3 についての主な意見として、歴史を踏まえて伝統のある現制服を大切にしてほしいという意見から、多様性の尊重を重視するなら制服と自由服の選択制、男女兼用タイプの制服、制服の廃止等の意見が寄せられた。また、現制服の機能性の向上を求める意見も複数見られた。

2023 年度の秋を目処に選択制を導入することは決定したが、保護者の意見はいずれも切実性を感じられるものばかりであり、大変貴重であった。今後、制服業者と詰めていく上で、生徒・保護者の意見を反映させ、より良いものを提供したいという思いを強くした。

Ⅶ. 成果と課題-今後の制服検討への展望-

2023 年 4 月より、新たな制服検討委員会が立ち上がり、筆者はその委員長として引き続き制服検討に携わることとなった。2023 年度の主目的は、本年 10 月からの制服選択制の円滑な施行に向けての準備となる。さらに、今後の本校の制服のあり方をさらに検討することも視野に入れている。生徒・保護者対象のアンケートに共通して、スラックスを導入することや選択肢を増やすことが本当の多様性の尊重につながるのか、という趣旨の意見が寄せられたことを重く受け止めている。多様性を尊重する制服のあり方をさらに模索し続けたいと考えている。

約 1 年間の検討の中で、生徒たちの主体的な参画が、間違いなく制服の検討を推進する働きとなった。検討を始めたころはどのように生徒の参画の場を保障することが望ましいか、見通しができていない状態であったが、むしろ生徒たちからの提案が大きく事態を動かしたと感じる。日本の学校では自治活動・生徒会活動が形骸化し、学校運営における生徒の意見表明の機会が十分確保されてこなかったことを指摘されることもあるが、少なくとも本校には当てはまらない。今回は役員会が中心となって動いたが、普段の学校生活からあらゆる場面で生徒の声を尊重し、生徒会活動等において生徒の自主自律の活動を

支援してきた積み重ねがあったからこそ、お飾りではなく主体的に参画し、公の事柄に影響を与える力が培われたと考える。

同時に、生徒たちの制服や徽章に対する強い思いを感じた。今回初めて、「制服のあり方について考える週間」を設け、制服の歴史や徽章の意味について初めて知る、考える生徒も多かったと思われる。普段制服についての不満を聞くことは少なからずあったが、それでも多くの生徒たちが現制服やベルトを維持したいと捉えていることは、本校の伝統に誇りを持っている証左である。3年経つと生徒たちは入れ替わる。ただ、本校の、この場でしか感じ得ないことは確かに脈々と受け継がれている。社会が日々変化していく中、制服のあり方も今後大きく変わる可能性がある。ただ、どのような変化であっても生徒の自主自立の精神が尊重される形でなければならぬとあらためて強く願う。

＜資料 お茶の水女子大学附属中学校 制服改訂に向けた動きまとめ＞

年 月	内 容
2021年6月	役員会より学校生活に関するアンケート実施
2022年3月	2022年度に向けた生徒指導・保健安全部会にて、ジェンダーレス制服を検討課題として挙げることを確認する。
2022年4月	2022年度生徒指導・保健安全部会基本方針にて、ジェンダーレス制服検討のプロジェクトチームを設置することを表明・承認される。 学校経営計画にも同様にジェンダーレス制服の検討が位置づけられる。 男女混合名簿の開始
2022年5月19日	生徒指導・保健安全部会にてジェンダーレス制服プロジェクトチームよりロードマップが提案され、検討を始める。
2022年5月24日	生徒指導・保健安全部主任及びジェンダーレス制服プロジェクトメンバーが本学生生活文化学部の難波知子先生（専門：制服史）を訪れ、お話をうかがう。また、継続的な支援をいただくことも了承される。
2022年6月23日	生徒指導・保健安全部ジェンダーレス制服プロジェクトチーム内で検討
2022年6月28日	生徒指導・保健安全部会にて検討。「ジェンダーレス制服」より、「多様性を尊重できる制服」の方が適切であると意見があり、これ以降ジェンダーレス制服の名称は使用せず。
2022年6月29日	生徒指導・保健安全部主任及び多様性を尊重する制服プロジェクトメンバーが槌屋服装店訪問。スラックスを導入した場合の可能性や制服の機能性向上、デザイン等について相談する。
2022年7月	生徒会役員会にて検討を本格化。生徒たちが感じる現在の制服の課題や今後のあり方について議論する。並行して、評議員にも検討を依頼。意見を収集。夏休み明けに生徒対象アンケートを実施することを確認。
2022年6月末～7月	校長、副校長及び各分掌主任により構成される企画委員会にて検討を始める。
2022年7月5日	職員会議にて副校長より、学校経営計画「多様性を認め合う（寛容さを育む）教育活動を推進する中で、生徒自身の意見等を積極的に取り入れながら、校内の様々な環境を見直していく。（例として、制服等）」に基づき、多様性を認め合

	えるようになる土壌のひとつとして、制服について、ジェンダーレスだけでなく、個々の生徒の選択の自由を保障することを、学校として推進していくこと、また、9日保護者会にてその旨を副校長から説明することが提案され、了承される。また、生徒指導・保健安全部の議論の過程や収集した資料、生徒の声を集めたものを職員会議に提出し、全教員で共有する。
2022年7月9日	保護者会にて、副校長より制服の検討を進めていること、および保護者対象アンケートの協力を依頼する。
2022年7月21日 ～7月28日	第1回保護者対象アンケート実施
2022年7月26日	本年度の生徒理解研修のテーマを制服とし、被服心理、被服意匠・色彩学を専門とする内藤章江先生（お茶の水女子大学）をお招きし、講演をしていただく。また、その後、小グループに分かれ、教員間で制服のあり方について議論を進める。第1回教員対象アンケート実施。
2022年9月	保護者アンケートの結果を踏まえ、役員会にて検討。役員会の意見として「今の形を保ちつつ新しい制服も考える」方向性を打ち出す。例）女子でもズボンを着られるようにする、ベルトの有無について検討するなど 最終的には生徒アンケートの結果を踏まえて判断することを確認する。
2022年10月3日 ～10月7日	「制服のあり方について考える週間」を設定 ・大正時代のベルト展示 ・図書室に制服について考えるコーナー設置 ・筑波大学附属中学校との交流会（制服と校則に関する意見交換会） ・3学年一斉道徳授業「心と体に心地よい制服とは？」実施
10月12日	第1回生徒対象アンケート →制服の良さと改善点を挙げてもらい、その結果を分析して第2回目のアンケートへとつなげる アンケート結果を生徒に公表（役員会便りにて） 1年生は10月14日実施 ※14日臨時役員会
10月17日	放送朝礼にて、生徒会長から第1回制服アンケートの結果報告と第2回アンケートの告知 制服検討委員会にて制服検討ロードマップの検討
10月18日 10月19日～21日	全校朝礼にて、校長より第2回制服アンケート結果を尊重する旨の講話 第2回生徒対象アンケート 制服検討委員会にて、ロードマップの確定 20日臨時役員会開催
10月24日	放送朝礼にて生徒会長からの話 役員会
10月25日	全校朝礼で校長先生から制服検討の今後の方向性についての講話 職員会議にてアンケート結果を踏まえた検討
11月2日	制服検討委員会

11月11日	引継ぎ式にて、第2回生徒対象アンケート結果発表及びここまでの制服検討の成果の発表
11月15日	職員会議にてアンケート結果を踏まえた検討と今後の方向性の確認
12月7日	制服検討委員会
12月17日	保護者会にて報告 ※検討の過程をまとめたプリント配布
12月20日～27日	教員対象アンケート
1月 1月31日	制服検討委員会 職員会議にて今後の方向性の確認
2月2日	生徒指導部長、制服取り扱い業者を訪問し、来年度の制服改訂と供給の見通しについて協議。 制服検討委員会
2月21日	職員会議にて来年度の制服選択制について承認
2月末～3月	役員会制服プロジェクト発足。スラックスの製作を始める。
3月2日	相川校長より制服選択制の導入の告知
3月7日～14日	第2回保護者対象アンケート
3月24日	1・2年保護者会にて、来年度からの制服選択制についての説明 ※第2回保護者アンケート結果をまとめたプリント配布
4月27日	役員会顧問及び生徒会長が制服取り扱い業者に試作品を提出
5月17日	新制服（お茶中スラックス）先行お披露目会開催

【註】

- (1) 本校の役員会が設置しているもので、意見・要望のある生徒は、所定の用紙に記入して投函すると、役員会が取り上げて検討し、その結果を報告するシステムである。
- (2) 「LGBTの観点からお茶中の制服を男女問わず、ジェンダーフリーな制服を取り入れていった方が良いと思いますか((例)上セーラー服・下ズボン/上学ラン・下スカートなど組み合わせを変えられるようにする)※自分が着たいかどうかとは別に考えてください」という質問項目に対し、40.4%が「とてもそう思う」、28.1%が「ややそう思う」、17.7%が「まあまあそう思う」と回答している。
- (3) 難波知子(2016)『近代日本学校制服図録』創元社、p80.
- (4) 前掲書、p80.
- (5) 同上。
- (6) 徽章の由来については、本校主事の中澤伊興吉の執筆による、本校 web ページに記載されているものを引用した。<https://www.fz.ocha.ac.jp/ft/menu/about/d001934.html> (2023年4月9日最終閲覧)
- (7) お茶の水女子大学附属高等学校発行の新聞(昭和25年11月創刊)。創刊時の「おちゃのみづ高校新聞」から現在は改称。
- (8) 難波(2016)、前掲書、p81.
- (9) お茶の水女子大学附属中学校『お茶の水女子大学附属中学校創立二十周年記念誌』pp.91-92.
- (10) 土方伸子(2020)「ついに完成！お茶高制服スラックス」『お茶の水女子大学附属高等学校研究紀

要』第66号、p85.

(11) 難波知子(2007)「近代日本における学校制服文化の形成 に関する考察-学校制服試論-」関西意匠学会『デザイン理論』第50号, p68.

(12) 愛知県一宮市「みんなの制服プロジェクト」委員会

<https://www2.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=2340009&date=20210331> (2023年4月9日最終閲覧)

(13) 本校の役員会は、会長1名、副会長2名、書記3名、会計4名、会計監査4名の計14名で構成される。